

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2017/06/02

ECB理事会と英総選挙を注視

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	↗	先月高値を超えられるか 予想レンジ: 120.300~128.000円	2-3
ユーロ/ドル	↗	一步踏み出すかECB理事会に注目 予想レンジ: 1.09800~1.14300ドル	4-5
ポンド/円	→	8日の総選挙が目先の焦点に 予想レンジ: 138.500~148.000円	6-7
ポンド/ドル	→	英米政治イベントがカギ 予想レンジ: 1.24500~1.33500ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

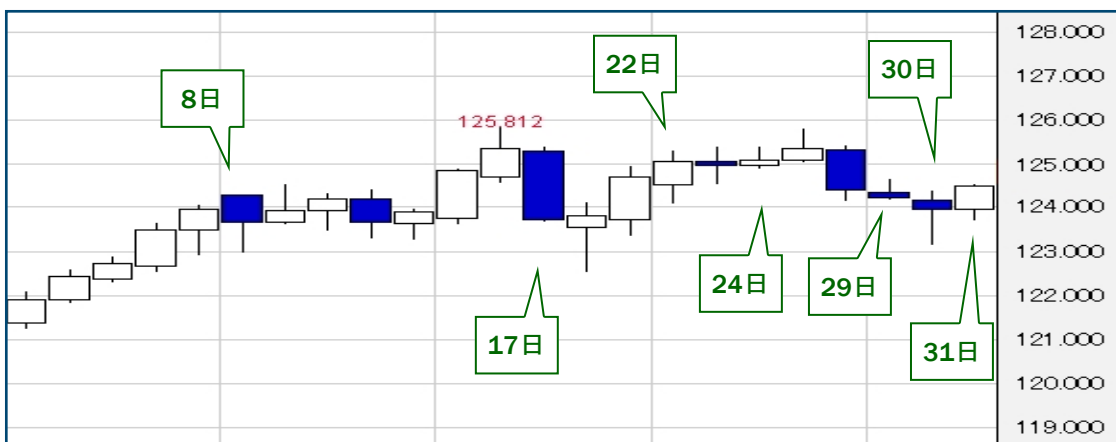
Copyright©2017 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 5月の推移

EUR/JPY

5月のユーロ/円相場は121.278～125.812円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.4%の上昇(ユーロ高・円安)となった。

仏大統領選で親EU派のマクロン氏が勝利した事で、年初に懸念されていたユーロ圏の政治リスクが大きく後退した。世界的な好景気を背景とする株高も追い風となり、16日に2016年4月以来となる125円台を回復した。その後は欧州中銀(ECB)の6月理事会での緩和縮小観測に支えられて高値圏でのみみ合いとなった。



四本値

OPEN	121.396
HIGH	125.812
LOW	121.278
CLOSE	124.514

8日	前日に行われた仏大統領選挙の決選投票で、中道系独立候補のマクロン氏が極右政党のルペン氏を大差で破り勝利した。親EU政権の誕生を好感してユーロ買いが先行するも、その後は材料出尽くし感が広がる中で反落した。
17日	「トランプ米大統領が連邦捜査局(FBI)のコミー前長官に、辞任したフリン前大統領補佐官に対する捜査を中止するよう要請していた」と米メディアが一斉に報じた。ロシア関連疑惑により減税策やインフラ投資などの政策が停滞するとのリスクや、大統領の弾劾懸念が浮上、株安が進む中で円が全面高となった。
22日	メルケル独首相が「ユーロがECBの金融政策の影響で弱過ぎるため、ドイツの製品が安くなっている」と発言した事を受けてユーロ買いが活発化するとユーロ/円は125円台を回復した。
24日	ドラギECB総裁は「マクロ経済環境は改善」とした上で「ECBは引き続き金融安定リスクを警戒」「フォワードガイダンスから逸脱する理由はない」「基調インフレ圧力は抑制されている」などと発言。早期の緩和解除に慎重姿勢を示した。ただ、米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録(5月2・3日分)で「追加利上げ前に最近の弱含みの経済指標が一時的とのさらなる証拠を待つのが賢明」との見解が示された事を受けてドルが下落したため、ユーロ/ドルは値を上げた。
29日	ドラギECB総裁が議会証言で「経済のダウンサイド・リスクはより減少している」「欧州圏の経済見通しは改善」としながらも、「フォワードガイダンスを含めた金融政策による支援はまだ必要」などと発言。また、イタリアでは総選挙が秋にも実施されるとの見方が広がる中、政局不透明感が高まり同国の株式と債券が下落した。
30日	「欧州中銀(ECB)は6月の理事会で経済リスク評価を上方修正し、緩和バイアス解除について議論する可能性がある」との報道が伝わると、ユーロが上昇。ただ、独5月消費者物価指数が前年比+1.5%と予想(+1.6%)を下回り、前月(+2.0%)から減速した事から伸び悩んだ。
31日	ユーロ圏4月失業率は予想(9.4%)を下回る9.3%に低下して2009年3月以来の水準に改善。一方、ユーロ圏5月消費者物価指数・速報値は前年比+1.4%と予想(+1.5%)に届かず、4月の同+1.9%から大きく減速した。

EUR/JPY

日経平均

OPEN	19154.03
HIGH	19998.49
LOW	19144.62
CLOSE	19650.57

独 D A X

OPEN	12478.46
HIGH	12841.66
LOW	12433.51
CLOSE	12615.06

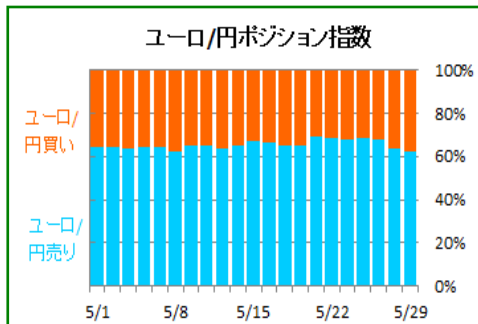
独2年債利回

OPEN	-0.733%
HIGH	-0.634%
LOW	-0.736%
CLOSE	-0.713%

独10年債利回

OPEN	0.317%
HIGH	0.460%
LOW	0.286%
CLOSE	0.304%

5月のポジション動向



6月のユーロ圏の注目イベント

- ・4月ユーロ圏小売売上高(6日)
- ・1-3月期ユーロ圏GDP・確定値(7日)
- ・ECB理事会(8日)
- ・6月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(13日)
- ・6月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(23日)
- ・6月独Ifc景況感指数(26日)
- ・6月独消費者物価指数・速報値(29日)
- ・6月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(30日)

6月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

ユーロ/円相場は、4月下旬にチャート上に窓を開けて上昇すると、5月中旬に約1年ぶり高値となる125.80円台まで続伸。その後は概ね123-125円台で高止まりする展開が続いている。こうした中、5月高値を突破するようならば上値模索の動きが再開する公算が大きい。その場合は129.479円(2014年12月高値149.760円-2016年6月安値109.197円の下げ幅1/2戻し)まで主だった目処が見当たらないため、127円ちょうど等の心理的節目を手がかりに上値を模索する事となるだろう。

経済イベントについて、ECB理事会に注目したい。事前予想では経済成長率見通しの上方修正、「フォワードガイダンス」の変更を予想する声が多い。ただ、足元でECBの緩和縮小観測を手がかりにユーロが買い進まれている事や、先月31日のユーロ圏インフレ指標が予想を下回る伸びに留まった事などから、ガイダンスの変更まで踏み込まないとの見方もある。その場合は、失望のユーロ売りが出る事も考えられる。

なお、日銀金融政策決定会合(15-16日)については金融政策の変更を予想する声は皆無であることから、無風通過となる公算だ。北朝鮮情勢に大きな変化がなければ、円主体で動く展開は期待しづらいだろう。(川畑)

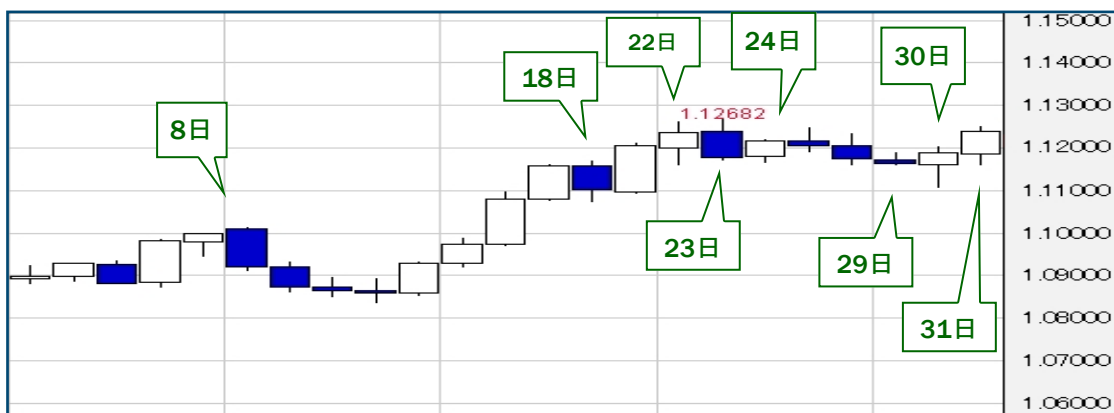
(予想レンジ: 120.300~128.000円)

ユーロ/ドル 5月の推移

EUR/USD

5月のユーロ/ドル相場は1.08390～1.12682ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約3.1%の上昇(ユーロ高・ドル安)となった。

7日の仏大統領選で親EU派のマクロン氏が勝利した事でユーロ圏の政治不安が和らいだ事や、トランプ米大統領のロシア関連疑惑(ロシアゲート)によりドル売りが強まった事から、ユーロ/ドルは堅調に推移。メルケル独首相のユーロ安けん制発言もあり、23日に昨年11月以来の高値となる、1.1260ドル台まで一段高となった。その後は欧州中銀(ECB)の緩和縮小観測を支えに、1.12ドル前後で高止まりする展開となった。



四本値

OPEN	1.08949
HIGH	1.12682
LOW	1.08390
CLOSE	1.12417

8日	前日に行われた仏大統領選挙の決選投票で、中道系独立候補のマクロン氏が極右政党のルペン氏を大差で破り勝利した。親EU政権の誕生を好感してユーロ買いが先行するも、その後は材料出尽くし感が広がる中で反落した。
18日	ECB理事会議事録が公表され、「6月のインフレ見通し引き下げの可能性を排除出来ない」「状況が進展すればガイダンスを見直すべき」などが明らかとなった。
22日	メルケル独首相が「ユーロがECBの金融政策の影響で弱過ぎるため、ドイツの製品が安くなっている」と発言した事を受けてユーロ買いが活発化した。
23日	独5月製造業PMI・速報が59.4と予想(58.0)を上回った事から、ユーロ/ドルは1.1260台まで上昇した。その後に発表されたユーロ圏5月製造業PMI・速報は57.0、独5月IFO景況感調査は114.6と、いずれも予想(56.5、113.1)を上回った。また、ショイブレ独財務相は「ユーロの為替レートはドイツにとって低すぎる」と発言した。
24日	ドラギ ECB 総裁は「マクロ経済環境は改善」とした上で「ECBは引き続き金融安定リスクを警戒」「フォワードガイダンスから逸脱する理由はない」「基調インフレ圧力は抑制されている」などと発言。早期の緩和解除に慎重姿勢を示した。
29日	ドラギ ECB 総裁が議会証言で「経済のダウンサイド・リスクはより減少している」「欧州圏の経済見通しは改善」としながらも、「フォワードガイダンスを含めた金融政策による支援はまだ必要」などと発言。また、イタリアでは総選挙が秋にも実施されるとの見方が広がる中、政局不透明感が高まり同国の株式と債券が下落した。
30日	「ECBは6月の理事会で経済リスク評価を上方修正し、緩和バイアス解除について議論する可能性がある」との報道が伝わると、ユーロが上昇。ただ、独5月消費者物価指数が前年比+1.5%と予想(+1.6%)を下回り、前月(+2.0%)から減速した事から伸び悩んだ。
31日	ユーロ圏4月失業率は予想(9.4%)を下回る9.3%に低下して2009年3月以来の水準に改善。一方、ユーロ圏5月消費者物価指数・速報値は前年比+1.4%と予想(+1.5%)に届かず、4月の同+1.9%から大きく減速した。

EUR/USD

NYダウ平均

OPEN	20962.73
HIGH	21112.32
LOW	20553.45
CLOSE	21008.65

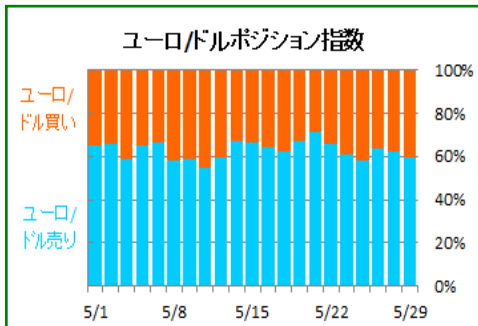
独10年債利回

OPEN	0.317%
HIGH	0.460%
LOW	0.286%
CLOSE	0.304%

米10年債利回

OPEN	2.2785%
HIGH	2.4210%
LOW	2.1791%
CLOSE	2.2028%

5月のポジション動向



6月のユーロ圏の注目イベント

- ・4月ユーロ圏小売売上高(6日)
- ・1-3月期ユーロ圏GDP・確定値(7日)
- ・ECB理事会(8日)
- ・6月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(13日)
- ・6月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(23日)
- ・6月独Ifo景況感指数(26日)
- ・6月独消費者物価指数・速報値(29日)
- ・6月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(30日)

6月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

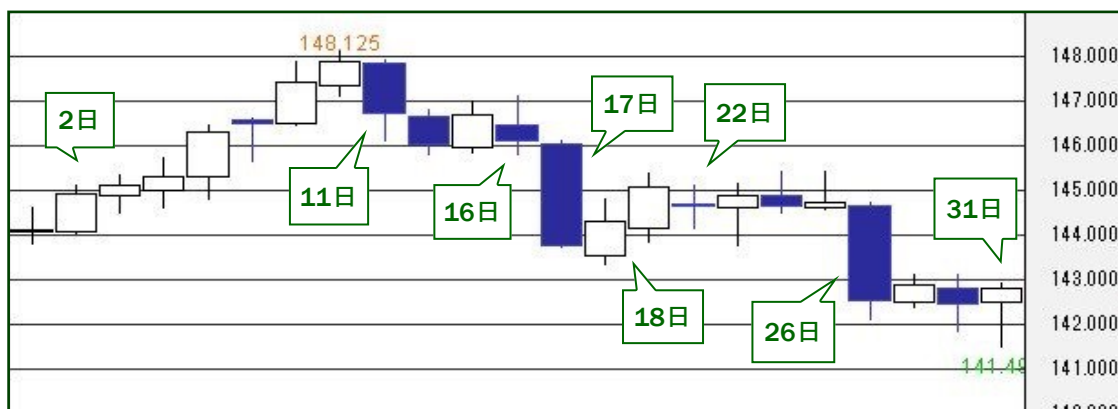
ユーロ圏の政治リスクが後退した事で、市場の関心はECB理事会に集中している。政治的イベントの消化と同タイミングで、シカゴIMMの投機筋ポジションが約3年ぶりにネットでロングとなるなど、ユーロ先高感が浮上している。今回は経済成長率の見通しや、「フォワードガイダンス」の変更を予想する声が多い。両方とも実施されればユーロが買われる公算が大きい。ただ、先月31日に発表されたユーロ圏のインフレ指標が予想を下回る伸びに留まった事から、ガイダンスの変更にまで踏み込まないとの見方もある。見方が分かれる中、発表前後は神経質な展開となりそうだ。また、今回はECBスタッフによる経済・インフレ見通しが公表される。前回3月のインフレ率(17年が+1.7%、18年は+1.6%、19年は+1.7%)や経済成長見通し(17年が+1.8%、18年は+1.7%、19年は+1.6%)から変更があるか注目したい。

ユーロ/ドルは週足の一目均衡表の雲上限を突破した事で、三役好転が点灯。これにより、年初に強まっていたパリティ(1ユーロ=1ドル)割れの可能性は大きく後退したと考えられる。先月の上昇局面で上値を阻んだ2016年11月高値(1.12989ドル)を突破すると、昨年6月以来となる1.14ドル台乗せを意識しつつ一段高となる事もあるだろう。(川畑)

(予想レンジ:1.09800~1.14300ドル)

ポンド/円 5月の推移

5月のポンド/円相場は141.492~148.125円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.1%の下落(ポンド安・円高)となった。前半は、原油高・株高を背景に円安が進行した影響から148円台に上昇して年初来高値を更新。しかし、中盤以降はじりじりと弱含んだ。トランプ米政権にロシア関連疑惑が浮上した事や北朝鮮が毎週末のようにミサイル発射を繰り返した事などが円高材料視された。また、終盤は先月にポンド買い材料となった6月8日の総選挙における与党保守党の圧勝観測が後退する格好でポンド安に振れた。



四本値	
OPEN	144.105
HIGH	148.125
LOW	141.492
CLOSE	142.812

2日	英4月製造業PMIが57.3と、前回(54.2)から大きく上昇して約3年ぶりの高水準を記録。市場予想(54.0)を大幅に上回った事からポンド買いが強まった。
11日	英中銀(BOE)は政策金利と資産買入れプログラムの現状維持(0.25%、4350億ポンド)を決定。議事録で政策金利の決定は7対1(フォーブス委員が0.25%利上げを主張)、資産買入れプログラムは8対0であった事が明らかとなった。四半期インフレレポートでは、インフレ見通しを2017年が2.7%、18年は2.6%、19年は2.2%(2月時点:2.4%、2.8%、2.5%)としたほか、成長率見通しは17年1.9%、18年1.7%、19年1.8%(同:2.0%、1.6%、1.7%)とした。利上げ票が前回から増えなかった事や、カーニー総裁が会見で「家計支出とGDP成長の鈍化が著しい」などと発言した事などから、ポンド売りが優勢となった。
16日	英4月消費者物価指数は前年比+2.7%と市場予想(+2.6%)を上回り、3月の+2.3%から上昇が加速。英4月生産者物価指数も前年比+3.6%と市場予想(+3.4%)を上回ったが、ポンド買いの反応は一時的であった。
17日	英4月雇用統計は失業率が2.3%と3月(2.2%)から小幅に悪化した一方、失業者数(失業保険申請件数)は1.94万人増と3月(3.35万人増)から増加幅が縮小した。また、1-3月の週平均賃金は市場予想通りの前年比+2.4%であった。
18日	英4月小売売上高(含自動車燃料)が前月比+2.3%、前年比+4.0%と予想(+1.1%、+2.1%)を大きく上回ると、ポンドが急騰する場面があった。
22日	6月8日の英総選挙に関する複数の世論調査でメイ首相率いる与党保守党の野党労働党に対するリードが縮小した事からポンド売りが先行。前週末に保守党が発表した選挙公約で、高齢者の負担増を求めた事などが支持率低下に繋がった模様。
26日	英総選挙に関する世論調査で、与党・保守党支持が43%、野党・労働党は38%となり、与党のリードが前回調査の9ポイントから5ポイントに縮小した事を嫌気して、ポンド売りが優勢となった。その後、米1-3月期国内総生産(GDP)・改定値が前期比年率+1.2%と速報値(+0.7%)から上方修正された事を受けてポンド売り・ドル買いに拍車がかかると、ポンド/円も続落した。
31日	英総選挙に絡む世論調査の結果から、メイ首相率いる保守党の議席数が現状の330議席から310議席程度まで落ち込み、過半数(326議席)を切る可能性があるとして報じられた事を受けてポンド売りが強まった。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/JPY

日経平均

OPEN	19154.03
HIGH	19998.49
LOW	19144.62
CLOSE	19650.57

FTSE100

OPEN	7203.94
HIGH	7586.45
LOW	7203.94
CLOSE	7519.95

英2年債利回

OPEN	0.075%
HIGH	0.176%
LOW	0.064%
CLOSE	0.131%

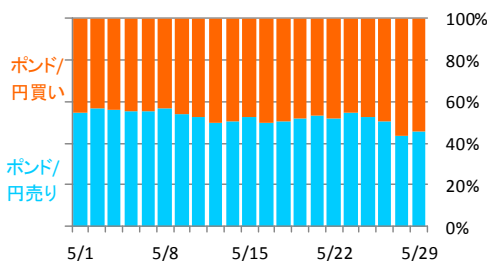
英10年債利回

OPEN	1.085%
HIGH	1.223%
LOW	0.980%
CLOSE	1.046%

5月のポジション動向

6月の英国の注目材料

ポンド/円ポジション指数



- ・5月英製造業PMI(1日)
- ・5月英建設業PMI(2日)
- ・5月英サービス業PMI(5日)
- ・英総選挙(8日)
- ・4月英貿易収支(9日)
- ・4月英鉱工業生産(9日)
- ・5月英消費者物価指数(13日)
- ・5月英小売物価指数(13日)
- ・5月英生産者物価指数(13日)
- ・5月英雇用統計(14日)
- ・5月英小売売上高(15日)
- ・BOE政策金利発表(15日)
- ・BOE議事録(15日)
- ・1-3月期英GDP・確報値(30日)

6月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

6月のポンド相場の注目イベントとして、8日の英総選挙に関心が集まろう。4月にメイ首相が前倒しの総選挙実施を発表した直後は、与党・保守党の支持率が第1野党・労働党の支持率を20ポイント以上上回っていたが、5月31日時点の世論調査では、その差が3~5ポイントまで縮まっている。仮に、保守党の議席が過半数を割り込むとなれば、欧州連合(EU)との離脱交渉に影響が及ぶ公算が大きい。メイ首相が退陣を余儀なくされる可能性も排除できなくなる。その結果、ポンドは政局混迷を嫌気して売られる事になると見られ、ポンド/円は、現在138円台半ばにある52週移動平均線あたりまで下落する可能性があるだろう。

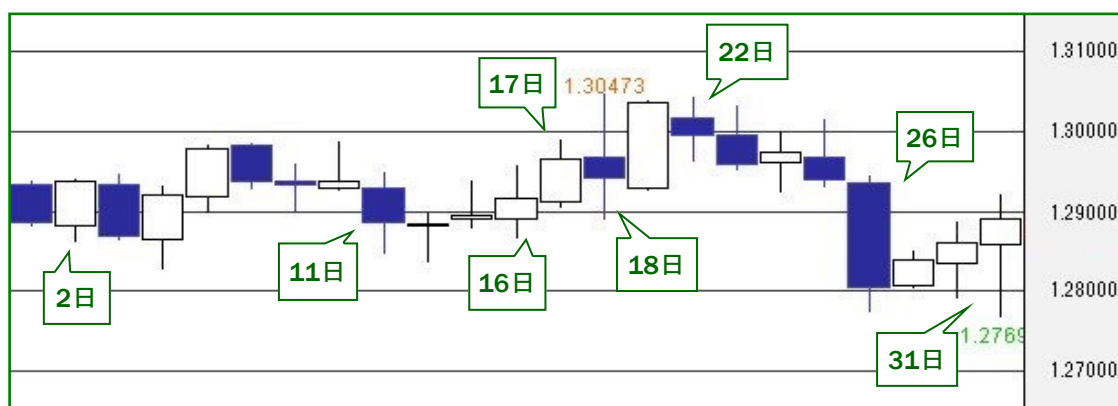
一方、このまま保守党がリードを保って過半数(326議席)および現有の330議席以上を確保できれば、ひとまずポンドに買い戻しが入りそうだ。ただし、その場合でも、メイ首相の求心力が高まり、離脱交渉がスムーズに進むとのシナリオはあまりに楽観的と言わざるを得ない。誰が交渉に当たろうとEU側の譲歩を引き出す事は極めて困難だろう。保守党の勝利でもポンド/円の上昇には限りがあると見るべきであり、昨年12月高値と今年5月高値でチャート上に形成しているツインピークス(ダブルトップ)の148円台前半を越えるのは難しそうだ。(神田)

(予想レンジ: 138.500-148.000円)

ポンド/ドル 5月の推移

GBP/USD

5月のポンド/ドル相場は、1.27697～1.30473ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.4%の小幅な下落(ポンド安・ドル高)となった。上旬は決め手を欠き1.29ドルを挟んでもみ合ったが、米大統領にロシア関連疑惑が持ち上がると、中旬にはドル安主導で1.30ドル台に乗せた。ところが、終盤は6月8日の総選挙で圧勝が予想されていた与党保守党の支持率が低下。選挙を経てメイ首相の求心力が高まり、欧州連合(EU)との離脱交渉がスムーズに進むとの楽観シナリオが後退する格好となり1.27ドル台まで下落した。もっとも、ドルの弱さが継続する中で下値も限られ、結果的に横ばいに近い小幅安で取引を終えた。



四本値

OPEN	1.29348
HIGH	1.30473
LOW	1.27697
CLOSE	1.28918

2日	英4月製造業PMIが57.3と、前回(54.2)から大きく上昇して約3年ぶりの高水準を記録。市場予想(54.0)を大幅に上回った事からポンド買いが強まった。
11日	英中銀(BOE)は政策金利と資産買入れプログラムの現状維持(0.25%、4350億ポンド)を決定。議事録で政策金利の決定は7対1(フォース委員が0.25%利上げを主張)、資産買入れプログラムは8対0であった事が明らかとなった。四半期インフレレポートでは、インフレ見通しを2017年が2.7%、18年は2.6%、19年は2.2%(2月時点:2.4%、2.8%、2.5%)としたほか、成長率見通しは17年1.9%、18年1.7%、19年1.8%(同:2.0%、1.6%、1.7%)とした。利上げ票が前回から増えなかった事や、カーニー総裁が会見で「家計支出とGDP成長の鈍化が著しい」などと発言した事などから、ポンド売りが優勢となった。
16日	英4月消費者物価指数は前年比+2.7%と市場予想(+2.6%)を上回り、3月の+2.3%から上昇が加速。英4月生産者物価指数も前年比+3.6%と市場予想(+3.4%)を上回ったが、ポンド買いの反応は一時的であった。
17日	英4月雇用統計は失業率が2.3%と3月(2.2%)から小幅に悪化した一方、失業者数(失業保険申請件数)は1.94万人増と3月(3.35万人増)から増加幅が縮小した。また、1-3月の週平均賃金は市場予想通りの前年比+2.4%であった。
18日	英4月小売売上高(含自動車燃料)が前月比+2.3%、前年比+4.0%と予想(+1.1%、+2.1%)を大きく上回ると、一時ポンドが急騰し、昨年9月以来約8カ月ぶりの高値となる1.30473ドルまで上昇した。しかし、NY市場では米新規失業保険申請件数とフィラデルフィア連銀製造業景況指数がいずれも好結果となった事や、小安く始まったダウがプラス圏に切り返した事から米長期金利が上昇に転じるとドル買い(ポンド売り)に転換した。
22日	6月8日の英総選挙に関する複数の世論調査でメイ首相率いる与党保守党の野党労働党に対するリードが縮小した事からポンド売りが先行。前週末に保守党が発表した選挙公約で、高齢者の負担増を求めた事などが支持率低下に繋がった模様。
26日	英総選挙に関する世論調査で、与党・保守党支持が43%、野党・労働党は38%となり、与党のリードが前回調査の9ポイントから5ポイントに縮小した事を嫌気して、ポンド売りが優勢となった。その後、米1-3月期国内総生産(GDP)・改定値が前期比年率+1.2%と速報値(+0.7%)から上方修正された事を受けてポンド売り・ドル買いに拍車がかかった。
31日	英総選挙に絡む世論調査の結果から、メイ首相率いる保守党の議席数が現状の330議席から310議席程度まで落ち込み、過半数(326議席)を切る可能性がある事を受けて一時ポンド売りが強まった。しかし、別の調査で「与党保守党の支持率43%、野党労働党は33%」と伝わるとポンドは切り返した。

GBP/USD

NYダウ平均

OPEN	20962.73
HIGH	21112.32
LOW	20553.45
CLOSE	21008.65

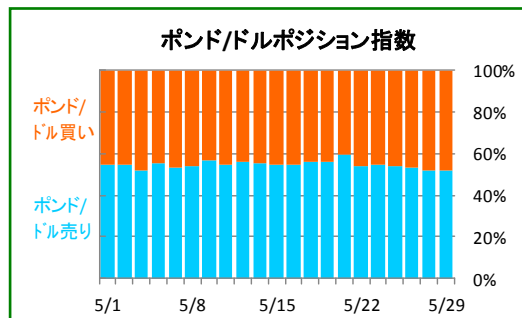
米10年債利回

OPEN	2.2785%
HIGH	2.4210%
LOW	2.1791%
CLOSE	2.2028%

英10年債利回

OPEN	1.085%
HIGH	1.223%
LOW	0.980%
CLOSE	1.046%

5月のポジション動向



6月の英国の注目材料

- ・5月英製造業PMI(1日)
- ・5月英建設業PMI(2日)
- ・5月英サービス業PMI(5日)
- ・英総選挙(8日)
- ・4月英貿易収支(9日)
- ・4月英鉱工業生産(9日)
- ・5月英消費者物価指数(13日)
- ・5月英小売物価指数(13日)
- ・5月英生産者物価指数(13日)
- ・5月英雇用統計(14日)
- ・5月英小売売上高(15日)
- ・BOE政策金利発表(15日)
- ・BOE議事録(15日)
- ・1-3月期英GDP・確報値(30日)

月間指標カレンダー(外部リンク)

6月の見通し

6月のポンド/ドル相場は、英・米の政治イベントに左右される展開となりそうだ。英国では8日に総選挙が行われるが、メイ首相はこの選挙を「欧州連合(EU)の離脱交渉におけるリーダーを問う」と位置付けている。ただ、当初は支持率で大きくリードしていたメイ首相率いる与党・保守党が、足元では第1野党の労働党に追い上げられており、過半数議席(326)を確保できるか微妙な情勢となっている。仮に過半数割れとなれば、EU離脱交渉プロセスにも悪影響が出る恐れがあり、政局混迷を嫌気したポンド売りが優勢となるだろう。

一方、米国では同日8日にコミー前FBI長官が上院議会で証言を行う。トランプ米大統領がロシア関連疑惑に関するFBIの捜査を妨害するためにコミー氏を解任したとの見方もあるだけに、証言内容が注目されている。いわゆる「ロシアゲート」問題に対する市場の受け止め方は定まっていない感もあるが、大統領の弾劾事由になり得る「司法妨害」が行われたとの疑惑が深まれば、短期的にはドルの重しとなりそうだ。

日本時間の8日から9日にかけては、英・米両国の政治イベントを睨んでポンド/ドル相場が大きく変動する可能性があるため注意が必要だろう。(神田)

(予想レンジ: 1.24500-1.33500ドル)